一橋大学大学院社会学研究科先端課題研究 16「human/non-human interface」
ワークショップ「アフター・サイボーグ」
2018 年 2 月 3 日（土）一橋大学東キャンパス第 3 研究館 3 F 研究会議室

群れることとは見えることである：サイボーグの冒涜と知覚の関係

グラント・ジュン・オオツキ*
翻訳＝難波美芸**

【要旨】
サイボーグ後に残されたのは、我々の諸文化を丁寧に、批判的に、そして何よりも冒涜的に読み解いていこうという呼びかけだった。ハラウェイによる独創的な『宣言』は、サイボーグがいかにして冷戦下の軍事技術と文化の冒涜的な読みから発生し、いかにして新たな反本質主義的フェミニズムにおける政治的主体性を生じさせるのかに焦点を置いている。今日、多くの人が、群れや群衆のモデルを通して人間・非人間の行動について考えようとしている。彼らは、群れが持つ、脱中心的かつ柔軟で、生成的な行動を用いて、トップダウンの権力構造に挑み、変革という結果へと繋げようと試みてきた。群れはいかにして冒涜的に理解されることができるだろうか。本発表では、アリの行動と人間の知覚に関する研究を出発点に、群れを単なる社会組織の一つの生成様態として見るのではなく、知覚的な身体化の一つの形式としても見ていきたい。群れるということは、ある特定の仕方で見るということなのである。そこで、人間が世界を知覚する仕方の変化というものが、群れが持つ技術であると同時に、潜在的には、群れに対抗する技術でもあるという点について検討していく。

冒涜、恐怖、知覚

本発表にはいくつかの目的があります。一つは、ハラウェイの『サイボーグ宣言』を振り返り、ハラウェイが論じていたヒトとテクノロジーの関係、そしてポリティクスとフェミニズムと解放の関係について考えてみることです。『宣言』におけるこれら両者の重要性は、私の感覚ですと、ポリティクスとフェミニズム、あるいはヒトとテクノロジーに関する個別の議論の陰に追いやられてきたように感じられます。ここでは、本発表において鍵となってくる冒涜（blasphemy）という概念を提示することで、サイボーグを、フェミニスト・ポリティクスとテクノサイエンスを互いにひねり込ませるような一つの像（figure）として捉えることの重要性を強調してみたいと思います。二点目は、この『宣言』が書かれた特定の文化的な文脈を描き出すことで、その文脈において冒涜が含意してきたものを前景化させる

* ヴィクトリア大学ウェリントン人文社会科学科
** 一橋大学大学院社会学研究科・博士後期課程

ことです。そして三点目に、私たちは何について冒涜的になりうるのか、そして現在この世界において、冒涜が私たちに果たすしうることとは何なのかを推察し、考えてみようと思います。

まずこの有名なイメージから始めましょう（図 1）。ミュラーリヤーの錯視として知られるこの錯視は、2 本の線によって作り出されます。人々は一方の線の方が他方よりも長いように知覚しますが、実際には、上下の線は同じ長さになっています。両端の矢印が向いている方向によって、そのように見えているだけなのです。この幻覚についてのよくある伝統的な説明は、目は私たちを騙すのだ、体は私たちを騙すのだ、というものでした――世界はソコに存在し、精神はココに存在し、その間で、私たちの身体は外部の世界から得た情報に対して何某かのことをしでかし、私たちが見ているものをゆがめたり、邪魔したり、あるいは歪曲させたりする、というものです。この説明を思い起こすたび、私たちは感覚と身体についてのデカルト的な懐疑主義を再生産してしまうことでしょう。そこでは、私たち個々人の精神に、世界へのアクセスという特権が与えられます。そして、知覚で結ばれる個人と世界の関係はコントロールできるし、また、コントロールすべきであるという発想を私たちから引き出します。

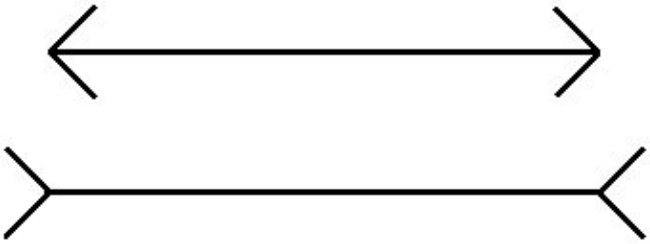

図 1

しかし、この錯視には、近代主義的なデカルト主義への回帰という落ち以上のものがあるはずです。このシンポジウム「アフター・サイボーグ」から刺激を受けて、ここでは、この問題について生産的な方法で検討していこうとする際、ダナ・ハラウェイの『サイボーグ宣言』が、どのように役立つのかを考えてみたいと思います。ハラウェイの宣言は、文化の分析者は冒涜的になれという強い指令であり、冒涜することへの道筋を提供してくれるものである、というのが私の主要な議論となってきます。冒涜は、私たちの社会との批判的・状況的・情動的なエンゲージメントであり、そこに内在する分析的・政治的な潜在性を浮き彫りにします。『宣言』においてサイボーグは物質的にも比喩的にも冒涜を身体化しますが、それはフェミニズムと、ポスト・サイバネティクスの冷戦期の北米が交差するところに位置付けられることで果たされます[1]。本発表の前半では、サイボーグが現れる社会的状況とはいかなるものだったか、そしてハラウェイがその時代の新たなポリティクスの可能性を引

[1] ハラウェイが述べているように、「私のアイロニックな忠誠、私の冒涜の革新には、サイボーグのイメージが位置している。」（Haraway 1991: 149＝2000: 287）。

き出すためにいかにしてサイボーグを用いたのかを振り返っていきます。

後半では現在に戻ってきます。現在、私たちは未だサイボーグのうちにいながらも、おそらくこれとは異なった、内在的分析とポリティクスを探り出そうとしています。ここからは群れ（swarm）についてフォーカスを当てていきます。群れに関していくつかの異なる例を集めてきました。それらは部分的には階層的であり、部分的には脱中心化された様態の諸関係であり、個人、ローカルな組織、グローバルな構造の間の緊張関係から自己組織化のパターンを生じさせます。ここで意味する関係とはとりわけ、分散型の自然-文化的ネットワーキングと計算技術・テクニックによって円滑になっている諸関係です。そこで、群れと呼ぶことによって、ここでは群衆（crowd）、大群（horde）、暴徒（mob）といった関連する形態も含み混みます。群れるものは非常にたくさん存在します。例えば、ハチも群れますし、ツイッターやフェイスブックのユーザーも群れます。カーシェアリングの利用者や、暗号通貨の採掘者たちも――今ニュースでひっきりなしに取り上げられていますが――群れますし、攻撃用ドローンも資本も群れます。あらゆるものが群れているように見え、群れないものは群れることによって潜在的に進化するようにも見えます。私の主たる関心は西洋で起きている超二極化した政治言説の発生における群れ、特に北米の文脈におけるそれです。群れることは反リベラルなグループの発生の元凶とされますが、一方で急進派もまた群れることを政治的解放のモデルとして捉えているようです。

しかし、実際、あるいは潜在的に、全てのものが群れるのだとすれば、このことは新たな分析を必要としていることの徴ではないでしょうか。そして、だからこそ私は冒涜的になろうと試み、ここでミュラーリヤーの錯視がストーリーに合流してくるのです。ここで、私が好きな論文を取り上げたいと思います。その論文は群れについて冒涜的に思考することに役立つはずです。その上で、今現在の政治から私たちが得られるものについてさらに考察を進めたいと思います。

サイボーグの始まりと終わり

「ある意味で、サイボーグは、西欧的な意味での起源の物語を持たない」（Haraway 1991：150＝2000: 289）。ハラウェイはこう述べます。サイボーグは、聖書のアダムのようにはこの世界に生まれてきていません。神や自然と一体だったものが、そこから分かれることでサイボーグになったわけでもありません。サイボーグは、部分的な発生とつながりの「内破」（Haraway 1992: 300）です。その現れについて一つのストーリーで説明するのは不可能ですが、そこには一つの帰結が想像されています。それは、「個を抽象的存在――あらゆる存在関係から最終的に切り離された、まるで宇宙に行った人間（Man）のような存在――として表現するという「西欧」のエスカレートする支配関係の黙示録的な

究極目的」（Haraway 1991: 151＝2007: 289）です。ハラウェイがここで参照している「宇宙空間の人間」は、「宇宙空間のサイボーグ」という 1960 年の論文から来ています。マンフレッド・クラインズとネイサン・クラインによって書かれたこの論文は「サイボーグ」という言葉の生みの親と言われています。この図はその論文からとってきたものです（図 3）。クラインズとクラインは実際に存在するサイボーグを使いました。それは、浸透圧ポンプに繋がれたネズミで、彼らはそこに、人間のサイボーグが宇宙空間で生命維持システムなしで生きられる未来を見出したのです――つまり彼らは人間がこういったポンプや機械によって身体を制御し、宇宙船なしでも宇宙へ行けるようになると想像したのです。そのため最初に印刷物として登場したサイボーグは、単に強化されたネズミではなく、フィクションと現実が合成したものでした。つまり、実験室の作業台の上にいるネズミという現実と、宇宙サイボーグというフィクションです。クラインズとクラインはサイボーグが私たちをどこへ導いてくれるのか考察します。サイボーグは、「人間の精神により大きく新たな次元を与えてくれるだろう」と（1960: 76）。そしてハラウェイはこれを、西洋的で、テクノクラティックな、男性優位主義的な個人主義の完全なる支配という夢として読み取りました。

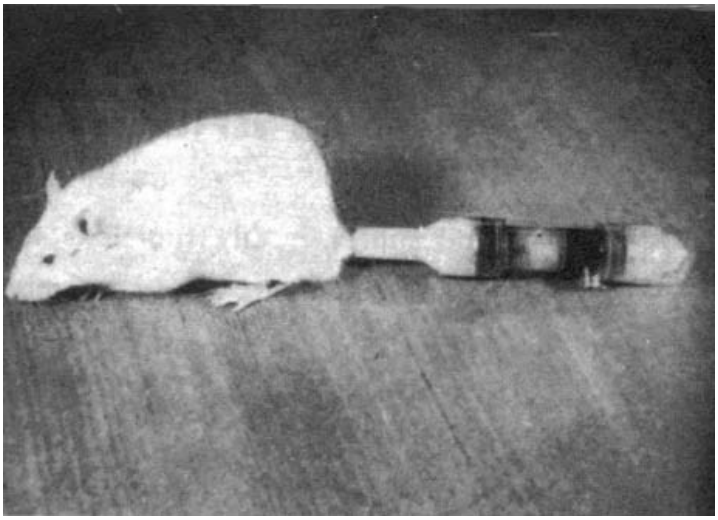

図 2　Cyborg Mouse with implanted osmotic pump, from Clynes and Kline　（1960: 27）

しかし、サイボーグの終着点となるのはこれだけではありません。というのも、1980 年代、ハラウェイがこれらの問題について書き、思索していた頃は、アメリカのフェミニストたちにとって反省の時期でもありました。それは、女性解放運動から間もない時期で、これらは特に第二次世界大戦後の技術発展に対する環境運動からの批判と合流しました。この頃、「平和のための原子力」（図

図 3　「平和のための原子力」アメリカ合衆国郵便切手（1955 年発行）

4)「化学でより良いもの、より良い生活」（図 5）といったスローガンが、怪物のようなもの、そしてマスキュリンなものとして捉えられるようになってきたのです。

フェミニズムの思想の中でも影響力のあるいくつかの領域において、このことは、女性と自然、男性と科学技術という強力なつながりと癒着し、女性の解放は近代化への拒否となり、自然への回帰とされます。キャロライン・マーチャントの 1980 年の著作『自然の死』（Merchant 1980）がこのことを示しています。マーチャントは、ヨーロッパにおける近世初期以降の近代科学の歴史を、男性による女性の支配の歴史と絡み合ったものとして読み解きます。例えば彼女が論じるこの彫刻（図 5）*は「科学の前に自らを晒す自然」（La Nature se dévoilant à la Science）と呼ばれ、女性が服を脱いでいる像です。マーチャントによれば、近代科学のパイオニアたちは科学的発見を、女性の服を脱がせることのようにみており、自然を技術的に活用することは彼女の中に侵入することであり、レイプのようなものだったわけです。自然に関する科学のレトリックはそのため、女性に関する男性優位主義者のレトリックと切り離せなかったのです。

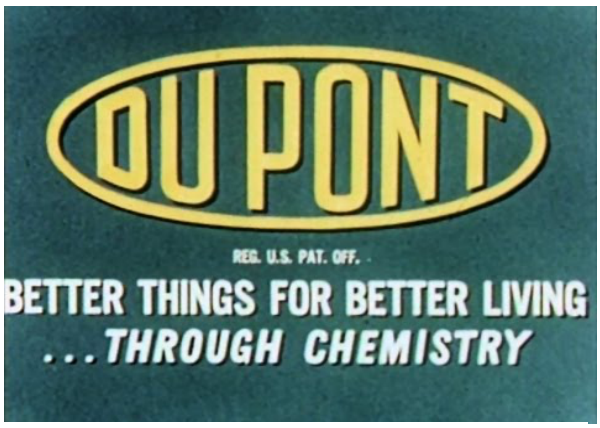

図 4　米デュポン社の 1960 年代のロゴ

図 5　ルイ・アーネスト・バリアス《La Nature se dévoilant à la Science》　（1899 年）*

*写真は以下から転載。Wikimedia Commons　（撮影者：Michel wal）：
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Barrias_La_Nature_se_dévoilant.jpg
以下、＊印は訳者による注。

フェミニストであり科学者であるハラウェイのような人にとってクラインズとクラインの宇宙を漂うサイボーグ人間の夢はぞっとするようなものだったわけですが、マーチャントのように、「女性」を純粋なもの、歴史を持たない自然の本質とするような近代科学技術の完全なる拒否もまた、恐ろしいものでした。一方は他方を含み込んでいるのであり、地球を離れ宇宙を漂うテクノロジカルな男性と、地球で自然との調和の中で生きる反テクノロジカルな女性との間には、実のところ何の対立も存在していません。両者はともに同じ世界で幸せに生きているのですから。フェミニズムにおけるこのあり方は、「女性」というカテゴリーを自然なもの=疑いようのないものにし、それぞれが生きる世界の状態は無視して、全ての女性の同質性を前提としています。そのため、サバルタンの女性が知覚されること、ましてやサバルタンの女性だろうが、黒人女性、あるいはクイアの女性だろうが、その声が聞かれることなどあり得ないのです。

ハラウェイはこのように述べます。「冒涜という作業の過程では、もの事を真面目に受けとめる必要が常にあった」（1991: 149＝2000: 286）。サイボーグは近代のテクノサイエンスとフェミニスト・ポリティクスについて冒涜的であるための一つの方法でした。フェミニスト・ポリティクスとサイボーグの存在の結びつきについて真剣に捉えることで、ハラウェイは神話とマテリアリティを互いに干渉させようと試みたのでした。サイボーグは、互いにつながり絡み合うテクノロジーと自然、身体と機械、内側と外側のつながりを体現したものであり、それは女性の像と交差します。ここでは、一見純粋であるかのような女性や自然のカテゴリーを、テクノロジーに翻訳することが、転覆の起爆剤となることを示しています。サイボーグネズミは女性を異なる形で捉えるための物質的な起爆剤となります。そこでの女性は自然で本質的なものではなく、部分的つながりの場として捉えられます。それは冷戦下の西洋という状況によって一時的に固定化され拘束力のあるものとなっただけなのです。単一性神話は消え去ります。そこでの現れは科学技術に反対するものではなく、つながるものとなります。そのポリティクスは女性解放のためにテクノサイエンスを拒絶するのではなく、その中に同盟を作ることができます。同様に、テクノサイエンスは宇宙を漂う男性個人の終着点の方角ではなく、いわゆる純粋に古典的な意味での男性でも女性でも、自然でも文化でもない、何か別の方角に向かって自らを合わせていくことができます。

ところで冒涜は情動的で、身体化された、そして感覚的な経験でもあります。冒涜に遭遇すると、私たちは不安や不安定性、そして恐怖と対面することになりますが、全ての恐怖が平等に作り上げられているわけではありません。冒涜は、私たちに感覚の鋭さと適応力を発展させることで、破壊的でニヒリスティックな恐怖と、創造的で生成力のあるものの区別をすることができるように要求してきます。サイボーグに特徴的な恐怖は、レイプの恐怖と、その対極にある去勢とクイア化です。既に指摘したように、マーチャントにおける近代科学

とテクノロジーに対抗する女性と自然の連合は、テクノサイエンスは女性的身体に対する性化された暴力であるという感覚に根ざしており、それは、男性は女性を恐怖に陥れることができ、テクノサイエンスは自然を恐怖に陥れることができるというものです。

こうした見方からすれば、クラインズとクラインは、テクノロジーによる自然のレイプのイコンとなるでしょう。この恐怖は、男性身体のクイア化に対する恐れと拒否という鏡像を持っています。それはサイバネティクスの生みの親であるノーバート・ウィーナーの作品から、哲学者のキャサリン・ヘイルズ（Hayles 1999）が見出したものです。ヘイルズによれば、ウィーナーがサイバネティクスを通して身体の境界が曖昧になるということに直面したとき、ウィーナーは、外部から内部への侵入、そしてそれに伴う、一つの身体のコントロールを喪失することに対して、内臓から出てくる本能的な抵抗といっても過言ではないようなものを感じたといいます。そしてウィーナーはエロティックな、しかし衛生的なメタファーを用いて、サイボーグのラディカルな曖昧化の可能性に対して、また、そのような可能性があるにも関わらず、ヘテロセクシュアルでマスキュリンな主体の自律性を正当化しようとしたのです。ウィーナーが対峙した恐怖は侵入されること、そして徐々に彼自身を失うことへの恐怖でした――ホモセクシュアリティ、去勢、クイア化への恐怖が、自律した個人たる男性を、支配の中心に確立させる方に働いたのです。

サイボーグが冒涜的たる所以はつまり、境界をぼかすことへの恐怖が破壊ではなくむしろ創造的な可能性といかにして繋がっているかを示している点にもあります。レイプへの恐怖を無視することなく、冒涜は、侵入に対するより広い恐怖を制し、それによって、単に完全なるコントロールを掌握させたり、そのような支配を受ける側になったりすることが問題ではないということを私たちに分からせます。ハラウェイが書いているように、サイボーグは「ホーリズムに対して慎重でありながらも、つながりを欲している」（Haraway 1991: 181＝2000: 348）ものなのです。あらゆる侵入がレイプなわけではないのです。そこから引き出される恐怖というものが区別しにくいとしても。

まとめると、冒涜はつまり、私たちの周りに存在している世界の神話と物質性に対して誠実であるのと同時に、それらが想起させうるような恐怖から単に逃れようとするのではなく、それらがいかにして互いにつながりを持ち、互いを汚しているのかということに注意深くあることです。サイボーグの冒涜性は、男性主義と軍事的なイメージの中にフェミニズムに役立つ何かを発見し、同時にフェミニズムの中にサイボーグのための何かを見つけ、そして両者の相互作用の中で変化していくことを妨げません。冒涜は、『宣言』にある有名な結びの一文の中でこのように要約されます。「スパイラル・ダンスには、女神もサイボーグも加わっているものの、私は女神ではなくサイボーグとなりたい」（1991: 181＝2000: 348）。これについては後にさらに議論に上ってくることになるでしょう。

群れ

おそらく私たちは未だにに、サイボーグが体現するものについて理解する途上にいるのだと思いますが、ハラウェイの『宣言』以降、私たちの世界の住み方について干渉し合う他のいくつかの形態が生まれてきています。そのうちの一つとして、群れという形態に焦点を当てたいと思います。

哲学者のユージーン・タッカー（2009）によれば、群れ（図 6*）は 3 つの特徴からなる組織です。群れは「(1) ローカルな行為を互いに調整する中で（coordinate)、複雑でグローバルなパターンの活動を生み出すことができ、(2) そうした現象は、個々の構成員間のつながり、あるいはコミュニケーションのあり方に大きく依存しており、(3) 一つのグループ内の個体は独立した画一的な役割を演じるわけではない」（Thacker 2009: 167)。加えて、これらは一つの集合体が生命（life）を持ち、その構成部分の生き方（life）には還元できないそれ以上のものである、という感覚をもたらすとされます。

図 6 *

私が群れというものに注目する理由の一つには、近年の北米が置かれた政治文化的状況があります。そのような状況は、政治の変化とテクノロジーの変化が重なり合い、群れの形態へと集合するものとして特徴付けられたり、議論されたりしているようです。政治の側面では、パルチザン的なポピュリストの政治によって進行する二極化があり、それはとりわけネイティビスト、あるいは白人ナショナリストによるオルタナティブ右翼の運動に代表され、過去 10 年の間、アメリカや他の西洋の民主国家で起きてきました。アメリカ大統領にトランプが選出されて以降、このことは無視しがたいものとなりました。この一年、ニュースではトランプの支持者と反対者の間の対立を見てきましたし、このことはアメリカだけでなく、多くの場所で見られるいわゆる「右」と「左」の間で、突破できない行き詰まりと

* 図は以下から転載。Cuthbertson, Anthony. 2016. “Swarm Intelligence: AI Algorithm Predicts the Future.” *Newsweek*. https://www.newsweek.com/swarm-intelligence-ai-algorithm-predicts-future-418707 （最終閲覧日：2020 年 3 月 7 日）

して現れてきています。

北米でよく聞かれる言説では、ソーシャル・メディアこそがこの二極化を促進させてもいます。ソーシャル・メディアが持つ政治と発展のための役割に関して、報道局が行なった調査にあるように、オンラインの群れは、反リベラルな政治の進行にとって、問題と答えのどちらにもなっています。ソーシャル・メディアは、狭い特定の帯域の情報伝達のための場とインフラとして機能しており、これが現代のパブリックを作り出しています。タッカーによって提示された群れの特徴は、白人ナショナリストとオルタナティブ右派グループにおいて顕著です。これらはオンライン・フォーラムや SNS 上で組織し、集会やイベントは実際にオフラインの世界で行います。彼らは有名なグループや個人によって促進しますが、多くのメンバーによってローカルに行われる草の根的な活動に依拠しています。

ところでここまで話してきた内容は、反対派の活動にも等しく当てはまります。例えば、オルタナティブ右派グループへの応答として発生したアンティーファ、つまりアンチ・ファシストの抵抗運動が挙げられるでしょう。もちろん他にも様々な群れが存在しています。それどころか、ポップ歌手のビヨンセのファンたちも自らを群れとして同定しています。彼らは自らを「ビーハイブ BeyHive」と呼び、ビヨンセは彼らの「クイーン・ビー」*であり、生物学的なメタファーを用いてファンのコミュニティを表しています。一方で、彼らは政治的な群れへと転じることもできます。それは 2016 年後半に起きました。ドナルド・トランプの支持者であるベツィー・マッコーイーが CNN で、ヒラリー・クリントンがビヨンセ好きであるという点について攻撃した際に、ビー・ハイブたちはマッコーイーのフェイスブックのページに群れをなし、彼女のコメントを批判しました。このように（図 7**）圧倒

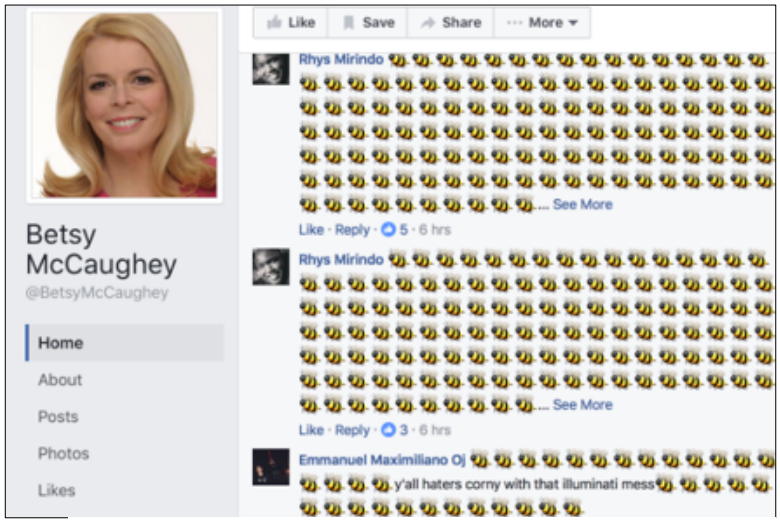

図 7 **

*ビヨンセ（Beyoncé）の最初の 3 文字、Bey（発音上は bee と同じ）を用いた BeyHive というファンダム名から、ビヨンセを queen bee、つまり女王蜂と呼んでいる。
**図は以下から転載。Ali, Rasha. 2016. “Beyonce’s BeyHive Swarms Trump Supporter Who Slammed Hillary Clinton for Listening to Her Music.” *THEWRAP*. https://www.thewrap.com/beyonce-fans-beyhive-beehive-troll-trump-supporter-hillary-clinton/ （最終閲覧日：2020 年 3 月 7 日）

するものでした。[2]

ここで問題となっている群れというものが、政治的に急進的なもの、あるいは後退的なものであるかは置いておいて、ここには興味深い点が二点あります。一つは、群れというものがグループのアイデンティティと価値を強固にするという点です。トランプ主義の文脈でいうと、人々の間には「民主的な発展神話」の裏切りと「企業利益の急上昇」、そして群れが「超二極化されたポジション」に置かれているという感覚があります（Bessire and Bond 2017）。これについては、ルーカス・ベザイアとデイヴィッド・ボンドが最近 *Cultural Anthropology* 誌に書いており、非常に多くの対立を生み出しました。歩み寄りとコンセンサスのマスポリティクスによる約束が構築されるどころか、現実世界そのものが何であるかについての相互の合意すら形成できない状況であるようです。

もう一つの興味深い点は、すでに述べたとおり、そのような群れに反対する急進派も、多くの場合に、さらなる群れを支持しているという点です。ジュディス・バトラーが最近このように述べています。「周辺化されたものたちは集まらなければなりません。そして、おそらく分節化されえない彼らの要求を、そこに居合わせた彼らの身体のアセンブリーを通して主張しなければなりません」（Butler 2017）。力を奪われたものたちもまた群れなければならないのです。再びベザイアとボンドの議論になりますが、「私たちに必要なのは、反権威主義的な様態のエンゲージメントであり、私たちを闘争する本質［に還元するのではなく］、差異の革命的なアセンブリー ［を活発化させるもの］です（Bessire and Bond 2017）[3]。この点はタッカーの議論における群れのシェーマとも符合するものです。しかし、これもまたオルタナティブ右派の集団にも当てはまるわけで、そうであれば、私たちは群れることのポリティクスについてどのように考えれば良いのでしょうか？

---

[2] とはいえこれは必ずしも完全に新しい現象というわけではありません。アノニマスを群れと見ることもできるでしょうし、さらに遡って、ソフトウェアのフリー化、オープン化運動の起源においては、検閲を「欠陥」として検知し、それを修復させるように振舞う、ある種の反検閲的有機体としてインターネットを捉えていました（Kelty 2008: 51）。

[3] こうした視点は、マイケル・ハートとアントニオ・ネグリの群れや「マルチチュード」（2004: 92）と共鳴するものです。彼らにとってマルチチュードは多様で異種混交的なエージェントがネットワークする集合体です。ハートとネグリは、群れのまとまりはそれを構成するエージェントの間にある本質的な差異があるにも関わらずまとまっている、ということではなく、そのような本質的な差異によって発生する点を強調します。しかし、彼らは群れの基礎として「コミュニケーション」という形態に価値を置いています。パウロ・ヴィルノも同様に、マルチチュードが発生するのは、「人間に特徴的な、複雑なコミュニケーションと知覚の能力における、人間が持つ言語的–関係的な可能性」からであると論じています（Virno 2004：57）。このコミュニケーションという概念は「感覚」を排除しているように見えます（Virno 2004: 77–78 をみよ）。本発表で論じるように、感覚はより注意深く検討される必要があるでしょう。

群れることは見ることである

ここでは、ミュラーリヤーの錯視に戻って、群れについて検討していきたいと思います。私がここで試みようとしていることは、ガッチリした分析を提供することではなく、群れと共に冒涜的に振る舞ってみることで何が起きるかを見てみることです。この発表において私から出せるもう一つの誘発物として、2013 年に出会った、ある興味深い論文をみて見ましょう。本シンポジウムのために原稿を作り出すまでこの論文については忘れていました。その論文とは、崎山朋子と郡司ペギオ幸夫という二人の科学者によって書かれたものです。両者は、クラインズとクラインによって書かれたサイボーグに関する最初の論文のように想像的に未来を描いたわけではありませんが、ハラウェイにとってサイボーグがそうであったように、私にとっては、群れがどのようなものでありうるかを考える材料となりました。

簡単にまとめると、この論文が提示するのは、アリの群れにはミュラーリヤーの錯視を「見る」ことができているらしい、ということです（Gunji and Sakiyama 2013）。人間のニューロンが幻覚を知覚するときと同じようにアリたちも群れるからです。ここでは二つの実験について説明されています。一つは実際のアリを使った実験で――上の写真（図 8*）がこの実験のものになります――、もう一つはアリのモデルのコンピューター・シミュレーションです（図 9**）。実験室での実験では、著者たちはシロップを使ってカードボードの上にミュラーリヤーの絵柄を塗り、その上にアリたちを放してビデオカメラでその動きを記録しまし

図 8 “A representative snapshot illustrating a distribution of ants” （Gunji and Sakiyama 2013: 2）*

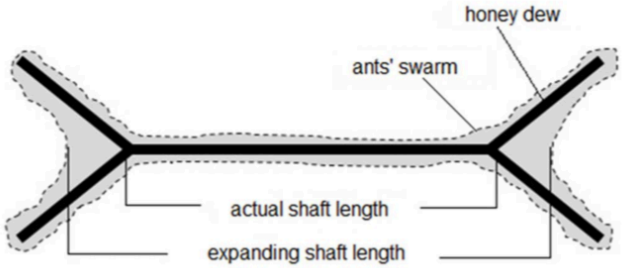

図 9 “Schematic figures to explain the data analysis and evaluation of lateral deviation” （Gunji and Sakiyama 2013: 7）**

* doi:10.1371/journal.pone.0081714.g006
** doi:10.1371/journal.pone.0081714.g001 本稿では図 B のみ抜粋。

た。この数分間のビデオは、アリがシロップを探したり、止まってシロップを食べている間の、ボードの表面のアリの集合密度を示しています。その結果、ミュラーリヤーの図の矢印がどちらを向いているかによって、両側の矢の間でのアリの動きは異なっており、それは人間が異なる長さの像として知覚しているのと同様であるということが示されました。コンピューターのモデルの方では、限られた数のアリが、ローカルな食料資源の摂取と、近接する食料資源の探索の間での兼ね合いに応じて動くアリを再現しました。シミュレーションでも同様のパターンが描き出され、人間がこのパターンを視覚的に経験するということは、知覚も、同様の兼ね合い的なものに関わっていることを示している、という結論へと著者たちを導きました。人間における視覚の場合、神経系のリソースが限られていることを前提とすると、そこでの兼ね合いとは、視覚的な構造の細かいディテールを解像することと、そのようなディテールが収まりうる全体的なパターンとの間で取られます。この兼ね合いにおいて調整されるゾーンは、アリの、あるいは神経の「近隣」（neighborhood）と呼ばれます。まとめると、この論文では、群れるアリは、ある意味で、糧食を捜しながらミュラーリヤー錯視を「見ている」ということを示しており、私たちの神経もまた同様に、錯視を知覚しているとき、「群れている」ということを提示しています。

さて、ここが今日の発表の出発点だったわけですが、このことは立脚点と視点が持つ興味深い役割を示唆していると言えるでしょう。一方で私たちは自身を群れの観察者として、あるいはミュラーリヤー錯視を知覚する者として考えることができます。個々のアリの動きではなく、私たちはそこで作られる全体的なパターンを見ています。群れは個の集団としてではなく、一つの生命体の主体そのものとして現れているわけです。他方で、私たちは出来事の立脚点を想像することもできます。その立脚点を糧食の探索の真只中に置き、目の前で嗅ぐものを用い、また同時に上からその動きを見下ろす視点も持ちつつ、その視点が、次にどこを探索すれば良いか教えてくれるのを利用することもできます。これは知覚可能な近隣を構築すること、そして異なるダブルバインド状態の交渉のプロセスに関わります。これは個が歩んだ世界の軌跡によって現れるものであり、それらを用いて未来に取る行動を導きます。さて、これら二つの主観の立ち位置が示唆しているのは群れの中にいるアクターたちの再帰的な距離です。それは個の近隣を知覚することと個の近隣を取り囲む群れ全体の知覚の間で揺れます。これら二つの知覚が互いにリンクするあり方は一つの場となり、この場によって、ある個体が持つ世界の感覚やコスモロジーの妥当性と重要性が計られ、近隣のアクターたちと個体との関係を組織するのです。その関係とは、一匹のアリやアクター、個人が、自らを囲む群れに対して持つ直接的な知覚と、自らが部分となっているより広いパターンをいかに理解しているのかについての直接的な知覚との間の関係です。

さて、この論文で面白い刺激になっている点は、私たちは、真の世界との関係において正

しいか間違っているかといった視点で自身の知覚を見るべきではない、という話だけではありません。この点はデカルト的な主体のあり方として最初の方で指摘したことです。そうではなく、私たちの知覚は、対立し競合するゴールや価値、あるいは利益といったものの間で取られた折衷の結果であり、それらは実践的で具体的な状況の中で働きかけあうものです。そうすると、あらゆる知覚は幻覚ということになります。しかし幻覚は私たちを欺くのではなく、与えられた状況下でもなんとか知覚しよう、こうした兼ね合いとダブルバイドの中でも知覚しようという最大限の試みなのです。

このように群れと知覚について考えることは、おそらく恐怖を抱かせるものでもあるでしょう。何が知覚で何が幻覚なのかを「知っている」ということについて確信がなくなるからです。私たちが世界と繋がる時に根っこのところにあるのは折衷であり、それは現実と自分自身についての感覚に対する完全なるコントロールを諦めるように要求してきます。外の世界は私たちの思考の境界を侵犯し続け、私たちの幻覚は世界に入り込んで行きます。私たちは、世界が私たちへと迫ってくることを、同時に想像し投影し予測します。恐怖を感じる人もいるかもしれませんが、それは謙虚なイメージでもあります。このことが本当に示しているのは、折衷と協働的な相互作用とは、私たちを自分自身へと向かわせ、絶対に完全には自分の選択によるものにはなり得ない世界との相互依存へと向かわせます。

おそらくこのことはポリティクスの超二極化について考えるのに役立つでしょう。これについて、群れることに沿って議論して行きたいと思います。サイボーグとは対比的に、というよりもむしろ、サイボーグを特徴付ける身体的な侵犯への恐怖と重ね合わせると、群れは認知的な侵犯に対する恐怖の周りに築かれるようにも見えます。外部の力による侵犯の影響によって、自身の知覚、意識、意図に対するコントロールを失うことへの恐怖です。そのため、アメリカの文脈で言いますと、対立する群れの間で交わされる批判は多くの場合、誤認と自己欺瞞の言葉の綾にフォーカスを当てています。自分とは逆サイドにいる人々は「フェイク・ニュース」の被害者であるとか、羊になぞらえて、彼らは自らが自己利益に反する行為を行なっていることに気がついていないとか、こういったことは左派と右派のいずれの側にいても聞かれることです。あるいはまた、彼らは盲目的なイデオロギーやアイデンティティ・ポリティクスを行なっていると責められることもあるでしょう。つまり、対立する者たちは、現実の「明らかな」事実と矛盾するような場合においても、特定のナラティブを押しつけるという罪を犯している、と。自分の側に立つ仲間は、あるがままの世界に即して自らの意思で行動しているでしょう――そこにはいかなる対立もなければ、ローカルに見えていることとグローバルに知覚していることの間にいかなる兼ね合いも存在しません。対立する側に立つ者は、世界の間違った知覚によってコントロールされ、イデオロギーやアイデンティティーを通して、あるいは「フェイク・ニュース」によって、自分が見たい

ように物事を見てしまっているのです。つまり、彼らは異なる仕方で兼ね合いを行なっており、そこには現実と知覚の間の完全なる分断があるのです。このような恐怖に対する最も簡単な応答は、侵犯に抗い、自らのアイデンティティとコスモロジーを強固にし、両者のリアリティを強化することです――このことは、ワイナーが身体的侵犯への恐怖に対して取ったリアクションとも通じます。

このことから私が考えるに至ったのは、アクターたちがそれぞれ異なった立ち位置にいる中での、兼ね合いと折衷のアッサンブラージュという視点から、群れについてどのように考えることができるかということです。ここで示唆されるのは、集団というものについて考えるとき、ダブルバインドによって引き起こされる特定の知覚的な親近性について考慮する必要性です。アイデンティティや、ましてや言語能力を、群れるための基礎として捉えようとするのではなく（cf. Virno 2004, Hardt and Negri 2004）、ミュラーリヤーの錯視からは、身体やインターフェース、あるいは人工器官などによって変容する人間の知覚が、いかにして差異化のゾーンを作り上げるのかを考えさせられました。このゾーンには異なる群れが集まる可能性もあります。つまり、私たちが使うテクノロジーや、それらがいかにして情報を異なる形式に翻訳するのか、特に、いかにしてこれらのテクノロジーが私たちの感覚を変化させ、空間性と時間性を変化させ、私たちが特定のモノを知覚したりコミットしたりするように仕向けるのかに、私たちは当然注意を向けていく必要があります。おそらく、私はこのことを原稿には書きませんが、ここで異なる種類の群れを見てもらいましょう（図 10*）。これ

図 10 《4. 意味のエネルギー（生化学的、物理的、精神物理的諸相）》

* 荒川修作、マドリン・ギンズ. 1979. 『意味のメカニズム』西武美術館. p.40

は荒川修作という、長年ニューヨークで暮らしていた日本人のアーティストの作品です。『意味のメカニズム』というシリーズの作品です。

こうした思いつきから、群れとは概してアクター間のつながりであるという思考に対して、群れは単に知識や記号を交換しているだけではないという点を示すことができていれば幸いです。知覚はそれ自体、一つのつながりの容態としてより真剣に取り組まれるべきものです。なぜなら、私たちが見たり、嗅いだり、聞いたり、触ったりする時、それぞれが異なる「近隣」や、異なる折衷、異なる近親性を、他の存在との間に伴うからです。人間の知覚が、技術的操作の広い領域において主題となるなか、いかに私たちが周囲のものやお互いを異なる形で知覚するのか、そして私たちの群れ方にどのような変化を与えるのかに注目していくことがより重要になってくるでしょう。

おそらく、群れは私たちに、異なる人間集団がいかに異なる現実、存在論、あるいは世界を実際に知覚しているのかを教えてくれます。多くの人類学者が近年、実際異なる知覚的な親近性は、異なる世界が形作られる周りに存在すると論じています。もしそうであるならば、おそらく西洋におけるオルタナティブ右派と急進的左派の群れは、群れの形成過程における異なる操作としてみるべきであると考えられます。というのも、そこでは二つの群れが互いに衝突しているのではなく、むしろミュラーリヤーの図上で右と左に別れるアリに似ているからです。

最後になりますが、冒涜は間違いなく恐ろしいものですし、群れも恐ろしいものでしょう。私はこの恐怖がどれくらい生産的なものであるかまだ確信はありませんが、おそらくアフター・サイボーグにおいては、この恐怖を試行してみて、フォローしてみることになるでしょう。この恐怖は、私たちの身体や知覚、あるいはそれ以外の何かに対する私たちのコントロールを緩めてくれるでしょう。ご拝聴ありがとうございました。

参照文献

Bessire, Lucas, and David Bond. 2017. “Introduction: The Rise of Trumpism.” Hot Spots: Cultural Anthropology Website. January 18, 2017. https://culanth.org/fieldsights/1030-the-rise-of-trumpism.

Butler, Judith. 2017. “Reflections on Trump.” Hot Spots: Cultural Anthropology Website. January 18, 2017. https://culanth.org/fieldsights/1032-reflections-on-trump.

Clynes, Manfred E., and Nathan S. Kline. 1960. “Cyborgs and Space.” *Astronautics* 5 (9): 26– 27, 74–76.

Fisch, Michael. 2013. “Tokyo’s Commuter Train Suicides and the Society of Emergence.” *Cultural*

Anthropology 28 (2): 320–43. https://doi.org/10.1111/cuan.12006.

Gunji, Yukio-Pegio, and Tomoko Sakiyama. 2013. "The Müller-Lyer Illusion in Ant Foraging." *PLoS One* 8 (12): e81714.

Haraway, Donna J. 1991. "A Cyborg Manifesto: Science, Technology, and Socialist-Feminism in the Late Twentieth Century." In *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*. New York, N.Y.: Routledge. （＝ダナ・ハラウェイ『猿と女とサイボーグ―自然の再発明』高橋さきの訳，2000 年，青土社）

Haraway, Donna J. 1992. "The Promises of Monsters: A Regenerative Politics for Inappropriate/d Others." In *Cultural Studies*, edited by Lawrence Grossberg, Cary Nelson, and Paula A. Treichler, 295–337. New York: Routledge.

Hardt, Michael, and Antonio Negri. 2004. *Multitude: War and Democracy in an Age of Empire*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.（＝マイケル・ハート，アントニオ・ネグリ『マルチチュード : 〈帝国〉時代の戦争と民主主義　上下』幾島幸子訳，2005 年，NHK 出版）

Hayles, N. K. 1999. *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*. University of Chicago Press.

Kelty, Christopher M. 2008. *Two Bits: The Cultural Significance of Free Software*. Durham and London: Duke University Press.

Merchant, Carolyn. 1980. *The Death of Nature: Women, Ecology, and the Scientific Revolution*. New York: Harper and Row.

Thacker, Eugene. 2009. "Swarming: Number versus Animal?" In *Deleuze and New Technology*, edited by Mark Poster and David Savat. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Virno, Paolo. 2004. *A Grammar of the Multitude: For an Analysis of Contemporary Forms of Life*. Isabella Bertoletti, James Cascaito, and Andrea Casson, trans. Los Angeles: Semiotext(e).

付録

質疑応答（一部抜粋）

久保:　グラントさんの発表に出てきた swarm（群れ）と［田中先生の］ゾンビというのはかなり違うものではないかと感じました。swarm の場合は、意識がないということがあまり関係ないのではないかと思うんです。両者の違いについてはどうお考えですか？

オオツキ:　久保さんが言うとおりに、確かに swarm には意識というのはあまり関係ないと思います。どちらかというと、swarm の中に、あるいは、swarm になり得るような行動をしている中から、意識らしいものが生まれるというような見方で良いかと思います。ここから英語に切り替えます。

（日本語訳）おそらく、意識と群れから生成する形式についての私たちの捉え方と、この背景的な世界、つまりより広いコスモロジー――それはかつて一神教の神だったわけですが、今ではそうではありません――について考えうることとの間には、深いつながりがあると考えられます。しかしそこにはある種の集合的な行動や団結、あるいは別のそういったものを支える存在も未だ残っているでしょう。ここで私が指摘したかったポイントとは、それを背景的世界と呼ぶにせよ、意識と呼ぶにせよ、意識的なものである必要はないということです。それはアイデンティティであるとか、自身について自覚している性格的なものであるとか、そういったものである必要はありません。そしておそらく知覚が私にとって興味深いのは、知覚というものがなんらかの社会的なもの、つまり全き固体化が起きるその瞬間以前に介入してくる関係性というものを提示してくれるからです。パオロ・ヴィルノは、前-個体基質について語っていますが、彼はそれをマルクスにおける類的存在と比較し、知覚もその部分であって、言語とは私たちの個体化の始まりであると論じています。言語自体が私たちを個にするわけではなく、言語を実践する中で私たちは個体化するということです。これについての彼の考え方は間違っていないと思いますが、一歩さらに知覚の領域へと立ち戻ることもできるのではないでしょうか。知覚と、私たちが周囲の世界を当然のものとして経験する仕方とは、私たちが個体化する上で通る道の一つであり、それはまた他者と互いに差異化する過程に通る道でもあります。しかし同時に、おそらく、私たちが互いに親近性を感じることができる様態、つまり、――それをこの時点で意識と呼ぶことはおそらくできないでしょうが――そこにはある種の個体化があって、それは、私たちが単に言語ではなく知覚についても考えることによって可視化、あるい

は追跡可能なものになるのではないでしょうか。